「人間の安全保障」の射程

遠藤　貢

二〇〇四年一〇月三〇日に小生の所属する東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラムと日本貿易振興機構アジア経済研究所の共催で「貧困と開発」をテーマにしたシンポジウムを開催させていただく機会を得た。特に二〇〇五年は、Ｇ８サミットの際に「貧困を歴史に」（Make Poverty History）といったスローガンが掲げられるなど、グローバルなレベルで「貧困の終焉」を巡る議論が活発であり、それに先駆ける意味もあったと考えている。シンポの折には、特に開発分野で活躍されている研究者の皆さんに「フィールド」からみえる新しい問題をご報告いただき、ご議論いただいた。このシンポでの小生の役回りは企画と司会であったが、基本的には「触媒者」（ファシリテーター）の域を出るものではなく、フィールドからこそ描くことのできる興味深い報告に聞き入っていた。

また、二〇〇五年の春には、日本が拠出している国連の「人間の安全保障基金」の支援を受けているザンビアの西部州でのプロジェクトであり、国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）が主な実施主体となっている「ザンビア・イニシアティブ」のサイトを訪れる機会があった。これは、ザンビア西部に流入したアンゴラからの難民のうち、本国への帰還を希望しない、あるいはザンビアへの定住を希望する難民を対象に、受け入れ地域への定住促進を支援するプロジェクトであり、二〇〇一年から調査・検討が始められ、その後本格的に実施されている。

この二つの小さな経験をつなぐのが「人間の安全保障」という概念である。「人間の安全保障」は、今や日本外交の一つの重要な柱にもなっている。平成一六年度からは先に挙げたように総合文化研究科の全五専攻の協力のもとに「人間の安全保障」を文理横断的に教育する大学院プログラム（修士・博士課程）を展開し、研究者養成に実践的な要素を加味しつつ、政策や実務に偏らない総合的な能力を備えた人材の養成を試みている。従来からの本研究科の特徴である学際性・総合性・国際性を前面に出して、実務経験が豊富な人や実践的関心が強い人には国際コミュニケーション能力、知的枠組、理論武装を身につけてもらい、逆に大学や大学院での勉学の経験はあるものの現場を知らない人には臨地実習やインターン経験を積んでもらっている。分野としては紛争と和解・共生、平和プロセスと国際協力、文化エコロジー、社会の自立と共同、生命と尊厳、開発と貧困、生存とライフスキル、サステナビリティの戦略という八つの柱を建てている。そして、今春には初めて修士（国際貢献）という学位を持った修士課程修了生を世に送り出す。わがプログラムの真価は、修了生の今後の活躍にもかかっている。果たして、どうなるか。しばらくは皆さんの今後の活躍を見守るしかない。

（えんどう　みつぎ／東京大学大学院総合文化研究科助教授）